

広報はしもと2016年8月号

前畑秀子ストーリー

第十三話

女性スポーツの黎明



今月号では、前畑さんが活躍を始める以前の日本の女性スポーツについて触れておきたいと思います。

国内における女性のための競技会の発展は、1920年以降だとされています。1922年には種目別の全国大会や複数の競技を取り入れた総合競技大会へと発展し、1926年には陸上競技の人見絹枝さんを国際大会に派遣するために日本女子スポーツ連盟が設立されました。人見さんは1926年第2回国際女子競技大会（イエテボリ）に単身で参加し、1928年アムステルダム五輪では、女子八百メートルで銀メダルを獲得しました。そして翌年、前畑さんが派遣された女性選手団初の海外遠征（ハワイ）が実現したのです。女性スポーツが国際化していくこの時期は、国内の女子競技会が増加する時期でもあります。この背景には、女子中等教育の普及と学校体操教授要目（現学習指導要領）へのスポーツ種目の採用、そしてスポーツ組織の成立といった影響がありました。

水泳については1922年に開催された全国女子競泳大会が最初の全国大会だとされています。しかし、陸上競技と同様に、その開催は大日本体育協会や競技団体ではなく、初期においては新聞社や女性スポーツ組織が担っていたのです。

（木村華織）

広報はしもと2016年9月号

前畑秀子ストーリー

第十四話

女性スポーツ組織



現在私たちは、男女の別に関わらずほとんどのスポーツに参加することができますが、前畑さんが選手活動を始めた1920年代は、女性がスポーツをすることに對する批判的な風潮がありました。ですから、競技団体が主催する各種競技会も男性を対象とするものがほとんどでした。こうした状況にアクションを起こしたのが前号で紹介した日本女子スポーツ連盟であり、水泳でいえば日本女子水上競技連盟でした。両組織は、女性を対象とした独自の競技会などを開催し、普及活動を展開していったのです。

女性スポーツ組織の活動は、女性たちに選手としての活動の場を準備するとともに、人見絹枝さんや前畑さんを中心とする選手たちに対し、国際大会での活躍の機会をもたらしただけです。そこでの選手たちの活躍は、男性中心であった競技団体を動かす一つのきっかけとなり、日本の女性スポーツを成熟に引きかわせるための起点となったのです。

人見さんは選手、新聞記者、指導者という複数の立場から女性スポーツの発展に力を尽くしましたが、1931年に24歳で他界します。次号よりたどる前畑さんの活躍は、人見さん亡き当時において水泳だけでなく、日本の女性スポーツの発展という点でも重要な意味を持っていたと考えられるでしょう。

（木村華織）

広報はしもと2016年10月号

前畑秀子ストーリー

第十五話

相山校長の存在



金メダリスト前畑秀子誕生の背景には、橋本小や紀の川の他に、女子教育の再編や女性スポーツ組織の誕生、運動を良妻賢母教育の重要な要素に位置づけた相山女学園など、複数の要因が関係していました。その中でも相山女学園の相山正式校長の存在は欠かせません。

相山校長は、練習環境を準備しただけでなく、前畑さんが編入してから結婚するまでの期間、彼女の学資および生活にかかる全ての金銭的負担を引き受けていました。また、高等女学校を卒業し専門学校に進学してからは、自宅の2階に前畑さんを下宿させ、校長夫妻が生活に関わるしつけを施すなど、前畑さんの亡き両親に代わり実質的な親としての役割を担っていました。そして相山校長が前畑さんへの教育において最も心を配ったのが、人格の陶冶だったといえます。

ベルリン五輪後に発行された『水の女王前畑秀子物語』には、「どんなに大選手になっても心が高慢きだったり、曲がっているのはそれは大選手とはいえない。立派な心がけと高い記録の両方をもってこそ本当の大選手となる」という校長の訓諭が記されていました。

前畑さんは選手としての活動だけでなく、学業や生活態度を含む人間教育を享受する中で、日本を代表する選手へと成長していくのです。

（木村華織）

広報はしもと2016年11月号

前畑秀子ストーリー

第十六話

名古屋から全国へ



1930年、相山女学園水泳部は前畑さんを部員に加え、創部三年目のシーズンを迎えました。「部員も年毎にその数を増やし今や総数四十を越えんとし昨秋前畑秀子を部員に加ふことを得、人員ようやく整ひて次の如き戦績を得たり」（『糸菊』昭和五年号より）とあるように、相山水泳部の活動はこの年を境に発展していくことになります。この時になると、女子平泳ぎで前畑さんの右に出る者は国内にはもういません。出場する試合で日本新記録を連発し、この年の日本水泳十傑では、五十メートル、百メートル、二百メートルで二位を大きく引き離してトップに立ちました。

この頃、名古屋には前畑さん以外にも全国で上位の選手がいました。愛知淑徳高女の加藤好子さん（背泳ぎ）や愛知県第一高女の神谷春子さん（自由形）です。1930年時点でプールをもつ女学校は全国で十九校、このうち三校が相山、淑徳、県第一だったのです。こうした環境が名古屋から多くの選手を誕生させたのでしよう。

前畑さんが頭角を現し始めるまでの間、女子水泳を牽引してきた京都、大阪、東京に、前畑有する名古屋が加わり、日本の女子水泳界が一気に動き始めるのです。

（木村華織）

広報はしもと2016年12月号

前畑秀子ストーリー

第十七話

相山での初シーズン



今でこそ屋内温水プールが主流となり、一年を通して水中練習をすることが可能になりましたが、温水設備を備えていなかった相山女学園の屋内プールでは、冬の間は泳げませんでした。ですから、この期間はランニングやバスケットボールが練習の中心でした。屋内温水プールなどほとんどなかった当時は、陸上での冬季練習を徹底することで体力づくりをしていたのです。一方、驚くことに、長期休暇には東京に出掛けて練習することもあったようです。前畑さんは入学して半年後の1930年3月から一カ月半にわたり、東京YWCAのプールで練習を行っていました。このプールは、当時の日本に唯一存在した女性専用屋内温水プールです。

シーズンを迎え、冬季練習は早々に実を結びました。その年の5月、東京神宮プールで第九回極東大会が開催され、前畑さんは女子200メートル平泳ぎに出場しました。昨年ハワイで惜敗したゲラティ選手の記録を上回る3分16秒8の日本記録を樹立し、さらに8月の日本選手権では、それを上回る3分12秒4で優勝しました。自身の日本記録を1年間で7秒4更新したことになります。当時の世界記録が3分11秒2ですから、この年、前畑さんと世界との距離は一気に縮まったといえるでしょう。

（木村華織）

広報はしもと2017年1月号

前畑秀子ストーリー

第十八話

両親の死



前畑さんにとって、相山女学園に編入して初めて迎えた1930年のシーズンは、世界との距離が一気に縮まった充実の年でした。ところがその矢先です。前畑さんは両親の死という堪え難い現実に向面することになります。1月に母親を脳溢血で亡くし、6月には父親も亡くしました。学生だった前畑さんにとって、両親の死が人生上の大きな出来事であったことは想像に難くありません。母親の死後、故郷の橋本に戻った前畑さんは、病に倒れた父の看病をしながら暮らし、父親の他界後には、相山校長宛に退学の希望を記した手紙を出したそうです。しかし、ここまでやってきた水泳をやめることの方が親不孝であるという周囲の説得、家族の協力、そして相山女学園の同窓生の熱意に動かされ、前畑さんは再び名古屋へと戻ったのです。復学後の状況を次のように述べています。「その夏、初めてのスランプに陥りました。力いっぱい泳いでも、重いからだを引きずっている、やっと泳いでいる感じです。競技会にもつぎつぎ出ましたが、記録は惨憺たるものでした」（自伝より）。

1931年のシーズンも終わり、ロサンゼルスオリンピックを翌年に控えた焦りと不安が前畑さんを襲います。そんな時でした。母親が夢に現れ、前畑さんを奮起させるのです。

（木村華織）

広報はしもと2017年2月号

前畑秀子ストーリー

第十九話

奮起の年



1932年を迎えました。ロサンゼルスオリンピックの選考会を半年後に控えたある晩、亡き母が夢に現れたといいます。「秀子、がんばるんだよ!」、そう言って自分を励ます母の姿に背中を押され、前畑さんは「死にものぐるいになって、がんばってみよう」と奮起したのです。冬は陸上での練習、そして4月1日からはまだ水の冷たいプールで水中練習を開始しました。泳ぎ続けることで次第に不振からも抜けだし、不安が自信へと変化していきました。その結果、6月5日のオリンピック選手選考一次予選会では、3分12秒4の自己タイ記録を出すまでに、復調しました。

この頃、日本水上競技連盟（現日本水泳連盟）にも変化が生じていました。それまで男子選手のみを強化や普及の対象にしてきた連盟が、組織内に「女子委員会」を設置したのです。このことは、ロサンゼルス大会に向けて女子水泳を強化対象に含めたことを示していました。男女を含めたオリンピック候補選手が発表され、1932年の3月には、前畑さんや小島一枝さんを含む女子選手たちが、東京YWCAにて十日間に渡る強化合宿を行いました。

選手、組織ともに準備が整い始めました。日本女子水泳初のオリンピック出場も目前です。

（木村華織）

広報はしもと2017年3月号

前畑秀子ストーリー

第二十話

ロサンゼルスへ



オリンピック最終予選会は体調不良のため不出場だった前畑さんでしたが、無事にオリンピック代表選手団に選出されました。水上競技選手団41名中、女子選手は競泳6名、飛込1名の計7名です。このうち3名が和歌山県出身の選手です。橋本小出身の前畑さんと小島一枝さん、妙寺小出身の岡初子さんが代表に選ばれました。この大会には女子陸上競技選手9名も出場しました。人見絹枝さんがただ一人の女性選手として参加したアムステルダム大会から4年、計16名の女子選手が日本代表選手としてオリンピック出場を果たしたのです。

ロサンゼルスまでは二十日間におよぶ船旅です。前畑さんは神戸港で大洋丸に乗船し、横浜、ホノルル、サンフランシスコを経由してロサンゼルスに向かいました。経由地で下船した際に現地のプールで泳ぐ以外は船上練習です。朝食後は甲板でデスマーク体操、水中練習は一日二回、船内の倉庫にテントを張り巡らせ、そこに海水を入れた小さなプールで行いました。飛込選手は体をロープで縛って飛込台からダイビングの練習、その他にも甲板で走る選手、槍をロープで縛って海に向かって投げる選手などがいたそうです。選手たちは様々な工夫を凝らしながらオリンピックへと向かったのです。

（木村華織）

広報はしもと2017年4月号

前畑秀子ストーリー

第二十一話

十分の一秒差



1932年7月30日、37の国と地域から1334名の選手が一堂に会し、第十回オリンピック・ロサンゼルス大会が開幕しました。日本からは131名（男子115名、女子16名）の選手が出場しました。大会が始まると男子水泳は全六種目中五種目で優勝する大活躍です。8月11日、遂に前畑さんの出番です。前畑さんは女子二百メートル平泳ぎに出場し3分10秒7でオーストラリアのデニス選手に継ぐ二位で決勝進出を決めました。

決勝はデニス選手、世界記録保持者のヤコブセン選手、前畑さんの3人の競い合いです。一五〇メートルのターンはヤコブセン選手がトップ、僅差でデニス選手と前畑さんが続きます。ターン後にデニス選手がスパートし、今度はやや遅れたヤコブセン選手と前畑さんが二位争いです。残り五メートル、息継ぎなしで泳ぎ切った前畑さんは、一位のデニス選手に十分の一秒と迫る二位でのゴールとなりました。3分6秒4の決勝記録は、従来の日本記録を5秒8も上回る日本新記録であり、オリンピック新記録でした。大会前、女子水泳チームの杉本傳（つた）コーチは、運が良く三位と予想していたそうです。予想を上回る「十分の一秒差」での二位が、安堵していた前畑さんを思わぬ方向へと向かわせることになるのです。

（木村華織）

広報はしもと2017年5月号

前畑秀子ストーリー

第二十二話

迷いと決意



「何事も死力を尽くせばそれが自分のベストだ、死力を尽くせば出来ないことはない」という言葉を胸に、ロサンゼルス大会を戦い抜き、第二位という結果に胸をなで下ろして帰国した前畑さんでしたが、周囲の反応は予想に反するものでした。「なぜ十分の一秒差で二位だったのか」、なぜ金メダルをとってこなかったのか」、「前畑さんの想いとは裏腹に、現役続行を願う想いが潮の如く押し寄せてきました。しかし、次のオリンピックまでの四年間は長く、苦しいのです。たとえ努力したとしても優勝できる保証などどこにもありません。想像しただけでも逃げたくなるような状況です。

コーチの杉本博巳氏は、『第十回羅府オリンピック大會水上競技報告書』の中で当時のことを次のように語っています。

「十分の一秒差で惜しくも優勝を逸してしまっただけは残念だと人々は思うかも知れないが、私はよくもまあ二位に食い込んだものだ」と云いたい。実際それが本当だ」。水泳を知る人からすれば前畑さんの成績は十分過ぎるものでしたが、世間はそれを理解しませんでした。こうした中で四年後のオリンピックに向かうのは生半可なことではありません。しかし、悩みに悩んだ末に、前畑さんはベルリンオリンピックへの挑戦を決意したのである。

（木村華織）

広報はしもと2017年6月号

前畑秀子ストーリー

第二十三話

世界記録の重圧



四年後のベルリン五輪出場を目指す決めた前畑さんにとって、目標はただ一つ、金メダル獲得でした。本人の目標というよりも世間がそれしか許さなかったという方が適切かもしれません。ロサンゼルス大会以降、前畑さんには国民の期待、国家代表の責務など、計り知れない重圧がのしかかっていきました。しかし、決めたからには歩みを止めるわけにはいきません。「いったんはじめたことは最後までやり抜く」、それが前畑さんの信念でもあるからです。

一日二万メートル、一年365日練習ともいわれた前畑さんの猛練習は、早々に実を結びました。1933年に行われた第七回神宮大会では、ベルリン五輪を見据えた「記録を作る為の試泳会」が行われ、前畑さんはこの試泳会で自身初となる世界新記録を樹立したのです。しかも二百メートル平泳ぎだけでなく、四百メートル及び五百メートル平泳ぎを含む三種目で世界記録保持者となったのです。ところが、嬉しいはずの世界記録は前畑さんを一層苦しめました。「世界記録など出さなければ良かった」、「次の五輪で負けたらどうなるのか」、皮肉にも努力の成果が彼女を苦しめたのです。そして、世界記録の重圧をはねのけるのもまた、努力だったのです。

（木村華織）

広報はしもと2017年7月号

前畑秀子ストーリー

第二十四話

水泳界の変化



前畑さんが世界記録を樹立した頃、日本の水泳界には変化が生じていました。日本水泳競技連盟（水泳連盟）は、1924年の創設当初より、男子競泳の強化を中心に事業を展開してきました。しかし、1932年には抜本的な組織改変がなされ、事業内容も大幅に拡大されました。

ロサンゼルス大会後、水泳連盟は「全国民を対象とする水泳、水上競技の全国普及運動」を今後の事業方針に据えたと発表しました。これに伴い、水泳連盟内には専門委員会が増設され、この一つに「女子部委員会」が設置されました。これは水泳連盟が女子の強化や普及に乗り出したことを意味しています。それまで水泳連盟以外の組織が主催していた女子の全国大会は、これ以降、水泳連盟主催で行われるようになります。オリンピック強化選手を集めた合宿練習会も行われるようになります。

戦前の水泳連盟史上、大幅な組織改編が行われたのは1929年と1932年だといわれています。前者は前畑さんを含む4人の選手がハワイに遠征した年、後者は前畑さんがロサンゼルス五輪で二位になった年です。偶然かもしれませんが、前畑さんの活躍と同時並行で、女子を取り巻く環境も変化していったのです。

（木村華織）